

【沖縄県立美来工科高等学校】

学習指導と学習評価の工夫・改善点の概要

企業と連携した動画制作に取り組む。地元企業の課題を解決するためグループで協働的に作品制作・プレゼンテーションを行う。「情報デザイン」「課題研究」「コンテンツの制作と発信」の科目を横断した取組により学習効果を高める。

評価規準

【知・技】企画書に沿って具体的に情報デザインを構築する動画制作の技術を身に付けている。

【思・判・表】クライアントの要望を理解し、情報デザインについての総合的な実践力を活用して創造的に制作することができる。

【主】メディアの特性を生かした情報デザインについて自ら学び、情報デザインを用いたコミュニケーションにおける課題の解決に主体的かつ協働的に取り組んでいる。

主体的・対話的で深い学びを実現する実践的・体験的な学び、個別最適な学び、協働的な学び

企画書作成・プレゼン

①プロトタイプ制作・プレゼン

②修正・作品完成・最終プレゼン

修正・納品・振り返り

科目「情報デザイン」(4) 情報デザインの活用に示すねらいを実現するため、地元企業と連携して、企業のもつ課題を情報デザインを活用して解決する。当初の要望を基に作成した企画書に沿ってプロトタイプ動画を作成し、企業に動画の制作意図等をプレゼンテーションして意見をもらう。生徒は主体的・対話的に活動し企業の要望を反映した動画の完成を目指す。

学習評価では、生徒自ら課題を解決するためどのように情報デザインを活用できたかを動画やプレゼンテーション、振り返りから評価する。

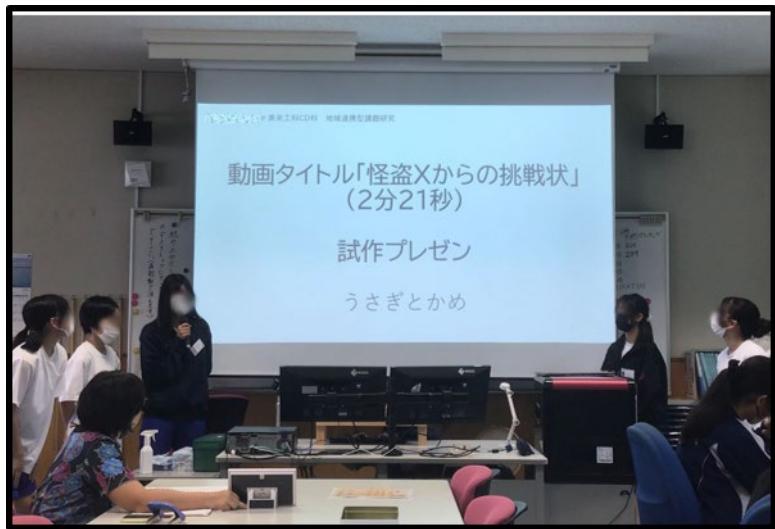
①プロトタイプのプレゼンテーションでは、企業の職員を学校に招いて、要望に沿った動画になっているか、伝えたい情報がわかりやすく伝わるか、間違った情報発信をしていないかを確認し、さらなる要望やアドバイスをコメントしてもらう。

②修正においては生徒間で相互評価を行い、作品完成に向けたフィードバックを得て次の過程に進む。自ら次の課題を設定して協働的に動画の完成に取り組む。

動画の制作（修正）は計3回行われるため、制作過程を繰り返す学習と同等の効果がある。また、科目「課題研究」「コンテンツの制作と発信」においても制作と関連付けた学習が展開される。

【「情報デザイン」 情報デザインの活用 地域連携型課題研究】②

【図① プロトタイプ動画プレゼンの様子】



【図② プrezent後の振り返りシートより】

②試作時の振り返り (10~11)

あなたが、[REDACTED]の課題を解決する動画を制作するにあたり工夫したことは何ですか？

実際には動画を形にしていくと、企画段階では見えなかつた課題、修正点がたくさん出てきてそれをどのように追和直していくかということに一層力を入れました。伝わりやすくなることは大前提でその上で映像が楽しく面白く作れるようが編集、映像にしていきます。

【工夫点①】地域の課題・学科の課題を解決するために、複数の科目で1つのテーマを取り扱った。

- 実践的なデザインを学ぶために、実際の企業の課題を解決する動画制作を実践した。
- 学習効果を高めるため「地域の課題を解決する動画を制作・発信する」というテーマに沿った探究活動を設定した。科目「情報デザイン(2h)」「課題研究(1h)」「コンテンツの制作と発信(2h)」で横断的に取り組み課題の解決を目指す。
- 活動期間は4ヶ月とした。1つのコンテンツを協働制作するため1グループ5名から6名程度と設定した。
- 実際の企業（制作のクライアント）がいることで生徒のモチベーションは高く、情報産業における情報デザインの役割を意識したねらい通りの動画制作ができた。

【工夫点②】成果物（動画・プレゼン・実習日誌・振り返り）を多面的に評価できた。

- 「情報デザイン」「課題研究」「コンテンツの制作と発信」のそれぞれの評価規準により学習評価を行った。この取組で出来上がった成果物を多面的に見取り、評価することができた。生徒は、異なる科目や身に付ける力を意識して学習した。成果物を複数の視点から作成する活動を通して学習の質の向上に繋げた。
- 動画を作る技術を高めるため、地域の課題解決を通して「情報デザイン」について考え動画制作をするため、多くの評価項目を一元的に活用する新たな学習評価となった。

本事例のポイント解説

沖縄県

本事例は、企業と連携した動画制作を通して情報デザインの資質・能力を身に付ける取組である。これまででは講義形式の学習が主であったが、専門教科情報科の見方・考え方を働かせ、情報産業に関する事象について問題解決に取り組む内容へ転換した。企業の要望に応える制作活動は、実社会を体験する効果的な学習である。

学習では生徒自身が企業と対話して課題を見つけ整理し、解決するための動画を作る様子や、生徒間の対話を通して新たな価値を見いだすことなど、主体的・対話的で深い学びが実現できている。教師はファシリテートによるゴールへの導き、カリキュラムの工夫など生徒自身が学びを深める手立てを講じている。

複数の科目を横断的に学習する工夫も効果的である。各科目の目標を達成するため、多面的な視点を持って学習することや、学習が実社会に役立つ事を実感できるよう工夫されている。

学習評価においては、コンテンツだけでなく実習日誌や振り返り活動をクラウドサービスを活用して効率よく評価している。これらは一部を自動化するとともに生徒がいつでも・誰でも見ることができるように工夫した。生徒は学習を自ら調整し、粘り強く課題解決に取り組むことができる。